子どもたちに“安心”をあげたい

—私の性教育活動紹介—

● 小栗産婦人科医院　院長

小栗　明子

おぐり　あきこ

愛知県春日井市に生まれ、育つ。1988（昭和63）年名古屋大学医学部卒業。96（平成8）年医学博士。小牧市民病院、JR東海総合病院、春日井市民病院産婦人科に常勤勤務ののち開業。

◆開業して5年。分かってきたのは、望まない妊娠や性感染症の増加でとりざたされる未成年だけではなく、おとなの女性も、「安心」な性生活を送れてはいないということだ。

◆女性や子どもが自分の性とからだをしっかりと知る機会を欠いていること、それどころか遠ざけられていること。それが問題なのだ。

◆これからは、変わっていくべきである。性教育は、人権教育。子どもたちには、社会の責任として、正しい科学的な知識を提供していくべきである。

◆それにより子どもたちは安心し、選択するべき機が熟すのを待つ余裕ができる。学校での性教育活動を通して、そう実感するのだ。

性教育に関わるまで

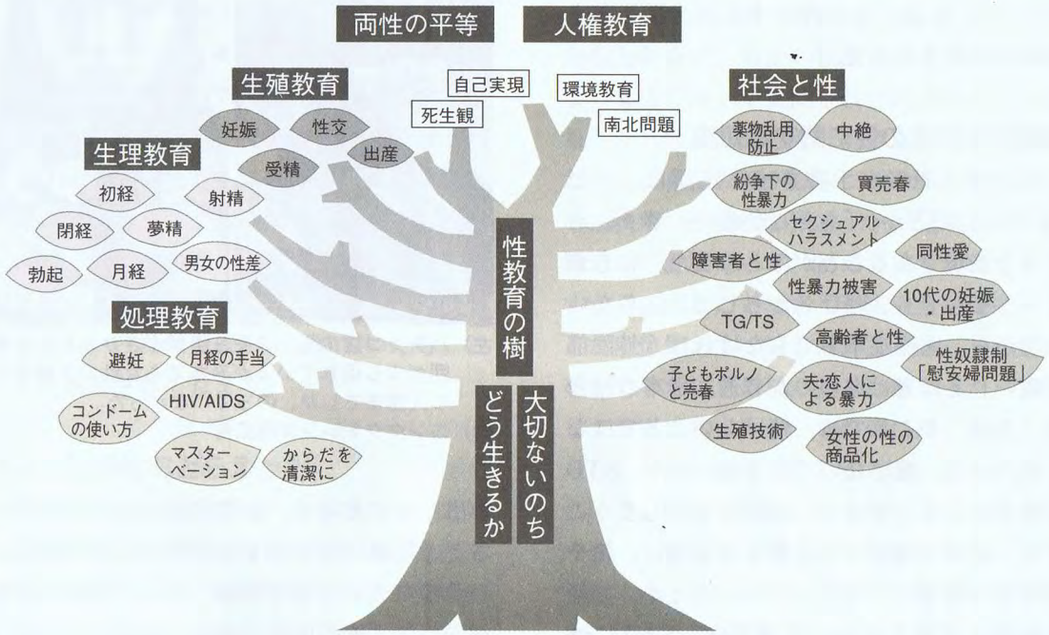
1998年9月、父の急逝を機に実家の医院を継承して、もう5年になった。当院も、かつては分娩をとりあつかう診療所であったが、20年ほど前にお産をやめて外来クリニックへと転身していた。勤務医生活から「近所のかかりつけ医」となり、患者とゆっくり対話する時間が増えたと思う。

この2年ほど、性に関する講話依頼を受けるようになった。そもそものきっかけは2001年12月、愛知の性教協[1]の例会にゲストとして参加し、「産婦人科外来初診でのアプローチ」というテーマで、日常診療、つまり患者とのコミュニケーションを通して考えることを報告させてもらったことだ（そしてほどなく、私は性教協に入会した）。参加していた名古屋市内の私立中学の養護教諭から、生徒向けに講話を、と依頼を受けたのがスタートだった。それから養護教諭つながりで、ほかの学校からも依頼がくるようになった。保健所から依頼されて、地域の母親対象に話をしたこともあるし、愛知県保険医協会員としての立場で依頼を受けることもある。これまでのところ、およそ2カ月に1回のペースで講話している。

患者のエピソード

講話のはじめのほうに、いつも引き合いに出す患者のエピソードがある。いかに、女性が自分の外性器と切り離されているか、を説明するためだ。

性教育の樹



アーニ出版ウェブサイト　トップページより

よく、外陰部にできものができた、と心配そうに受診してくる患者がいる。たいてい、落ち着いた年齢で子どもも産んだ経験がある方。診てみると、なんということはない、毛嚢炎である。「毛穴にばい菌が入って膿んでいるだけですよ」と説明すると、「あ～良かった」と安心される。「ご自分でごらんになるといいですよ」と言うと、「えぇっ？」とびっくりされる。顔にできるニキビと同じものが下にできただけ。ひと目見てみればわかるはず、わからなくて心配なら、婦人科に来ていただくのがいいのはもちろんであるが、少なくともあんなに不安がることはないはず。まず、自分でちょっとみてみる。それが、なぜ、できないかを考えてみないといけない。

男の子は、物心つくかつかないころから、用を足すたびに自分のペニスを目にし、触れている。自分の性器とよく、なじみになっているといえよう。しかし女の子は違う。鏡を使うでもしなければ、直接に目では見られない。自分のからだの一部なのだが、自分のものになってはいない。

学校の講話で外陰の部位名称を示したあと「外陰部は鏡を使わないと自分で見えないけれど、顔だって、鏡を使わないと見えないよね。お顔は朝晩、みんな念入りに手入れをするでしょう、今日、家に帰ったら、さっそく、外陰のこともチェックしてみてね」と話す。「自分のプライバシーゾーンだから、大切な場所だから、自分の部屋で落ち着いた気持ち

で、手を清潔にして、みてね」と。やっぱり「エ～ッ」と返ってきたりするが、話しをする私はおおまじめだ。

お粗末な日本の性に関する知識

問診票に患者が手書きする主訴は、ただ「かゆい」だとか、「あそこが痛い」等々、お粗末な表現であることがほとんどだ。仕方がない。そもそも、呼び名からして、知らないのだから。医療従事者でもなければ「外陰部が痛い」とは書けないのが普通。日本の社会の“普通”がこれでは、情けないことではないか。また、情けないですまないのが、STDに罹患したり、望まない妊娠をしてしまうことだ。産婦人科医であるおかげで私は、膣や内性器の構造がどうなっているかとか、月経や排卵、受精といった生理現象、STDについてよく分かっているけれど、こんなことは一部の専門家だけが知っていればいいことではないはずだ。一人ひとりが、自分の健康を自分で守るために身につけておくべき当然の知識だ。

なぜみんな知らないのか。女性器が単に、見えにくいところにあるから、当人がなじんでいないだけなのだろうか。いや違う。女性の性やからだが、モノ＝商品のように消費の対象になっている、興味本位の視点にさらされる社会であるからだ。女性が、自分の体に当たり前の関心を持つことが、いけないこと、タブーと感じさせられ、避けてしまうのだ。タブー視されるがために、しかるべき教育の機会までが、遠ざけられてきた。

世の中を少々ウオッチングしてみれば、女の体が商品として扱われている機会にいっぱい出くわすだろう。新聞広告に気をつけていると、写真のようなものが簡単にみつかる。一つはパチンコ店の宣伝。もう一つはコンタクトレンズ屋の広告である。もろに、女性の胸や脚が使われている。

写真

左）パチンコ店広告。スキャナが小さかったため周囲が少し切れているが原本でも女性の下腹部から大腿までしか、のっていなかった。
右）コンタクトレンズ店広告

精神的纏足（てん）

男性と違い、外性器となじめていない女性、自分の体の一部であるのに。これは大した問題なのである。自分の生＝性を生きられないことになる。いうなれば、これは精神的纏足だ。避妊手段にピルを選びたいと、診療所をおとずれる女性はまだ少数派なのだけれど、彼女らと接していて感じるのは、自分のからだをしっかりと自分で管理していこうという、気持ちも自信もあるということだ。ピルを選択できるのは、纏足になっていないナチュラルな女性だ。

マスコミのあり方も問題で、興味本位の視点で真実をねじまげ、大人（そして子ども）の判断力をにぶらせる一因となることがある。

先日、中学校医をしている歯科医師から聞いた話だが、朝のワイドショーで女の子の街頭インタビューシーンをみていたら、何人とセックスした、等々自慢げに話す姿が映っていたという。それが十代の女の子が投げかけるメッセージを代表しているわけではない。実際足で調査をすすめる木原雅子氏の報告によれば、彼女らの願いは「大人はきちんと情報発信せよ」なのである[2]。でも、茶の間番組でそういった報道ばかりされていたら、こちらは惑わされてしまう。

マスコミの好むとらえかた

問題としてとりあげるべき事項と、マスコミが好む視点とに大きな開きがある。たとえば援助交際する女子中高生についての記事が「アッケラカンSEX」だとか、さんざんな見出しで載るけれど、相手をしているのはどういう男性だろうか。社会人であり、妻帯者であったりもするわけだ。いけないのは、どっちだろう。責任ある立場にあるのは、どっちだろう。

医学部１年のときの取材

マスコミの、興味本位の、ゆがんだ視点。私自身が、それにさらされたことがある。経験した事実を、この場で紹介してみたい。医学部進学して最初の学年に、ご遺体の解剖があった。解剖実習が始まってしばらくしたころ、とある新聞社の取材に応じてほしいと同級生の男子学生から誘われた。確か男女２人ずつの学生が、構内のレストランで１人の男性記者とランチを食べながら、インタビューを受けた記憶である。いくつかの質問にみなで答えていたのだが、記者がこんな質問をした。たまたま、私の方を向いていたのだったかもしれない。細かい状況は覚えていないが、このような調子で質問された。「男性の、性器なんかはじめて見るわけだけど、どう？」とたんに、自分の顔がひきつるのがわかった。不愉快で、そして腹が立った。「そんなの、心臓だって肝臓だって、初めて見るわけなんですから。同じことです！」腹立ちを隠せず答えた記憶である。記者は、「ふうん、」と返事をしてそれ以上の突っ込みはなかった。果たして記事は載ったが、その件に関しては、載らなかった。載せてほしかった、あの問答も。私の返答はそんなに、つまらなかったのだろうか？…もし私が答え方を間違えていたらどうだったろう。考えると恐ろしい。そんなとき、答えた学生の名前は出ても、アホな質問をした記者の名前は、載らないものだ。

世の中にあふれる歪んだ情報

とある名古屋市内の私立女子高校で講話したとき、その学校の教諭から「生徒たちはこういう本を読んでいるのですよ」と教えても

図

読者（17歳）の投稿。自らの妊娠検診での想像だという。

らった雑誌がある。コンビニに並んでおり、ファッション情報誌でもあるので、どの子も読んでいるというが、記事にしろ投稿欄にしろ、すさまじい内容だ。乱交体験、妄想の紹介（図）など…。同じ雑誌の男の子向け版も出ているが、本年4月号の特集は「いかに女の子と“ヤる（性交する）”か」であった。

学校の先生も、まだ手探り

こんなとんでもない雑誌がまん延している一方、学校における性教育に関してはなぜかバッシングが強いため、なかなか先に進めない。ほとんどの学校が「うちは白紙状態だ」と、先生みずから前置きした上で講話依頼がある。割り当てられる時間も予算も全然ないそうである。本当はできるだけ少人数のグループで、子どもたちの聞きたいこと、知りたいことに合わせて進めていきたい性教育であるのに、よいところで1学年、たいていは3学年いっぺんに、話して欲しい、と言われることが多い。あるとき中学高校と、6学年いっぺんにはどうですか？と聞かれたこともある（これは、6学年まとめて入ることのできる場所がないので、なしになった）。

講話の準備

やり方はまず、聞き手である子どもたちのニーズを把握するため、行く先の学校にアンケートをお願いする。子どもたちがどの程度の知識をもっているか。具体的には、排卵だとか、基礎体温だとかの言葉（単語）をどれくらい知っているかを把握しておく。そうでないと、講話のあと「言葉の意味がわからなかった」といわれてしまう。そして、家族とよく会話をするか、異性とつきあいたいと思うか、など性に関する興味の程度を把握する。

講話の内容

3学年だと500人から700人へ、一斉に同じ話をしなければならない。中学生の、1年生と3年生では差が大きい。関心のあり方が、全然ちがう。1年生はなんといってもまだ「おぼこい」が、中学3年生は義務教育最後の学年、社会に出る子もいる。コンドームの使い方など、ここできちんと話しておかなければ、あとがない。いうまでもなく、望まない妊娠やSTDを避けるために必須の知識なのだから。

大きなグループを前にして、「性に関して、みなさんにとって、いま興味があるかないかは、それぞれです。でも、知識は前もって、持っているべきなのです」と言い置いてから話はじめる。性に対しては、あくまでポジティブなイメージを持っていてほしい。その考えから「弟たちの誕生」（双葉社）というビデオから一部、出産シーンを上映し、それから男女の外陰部の説明、月経と、そのトラブルなどの説明。アーニ出版のビデオ[3]から包茎について（断られなければコンドームの付け方について）、岩室紳也医師による説明を流し、STDについて説明する。それから、タバコの問題に関しても、少しでもいいから触れさせて頂く。ざっと流すとこういう内容である。

コンドームのことはダメ

2003年11月に、たまたま2カ所の公立中学から講話依頼があったが、片方の学校からコンドームの話はやめてくれと言われた。「でも生徒たちはみな、コンドームという言葉を知っているのではないですか？」と尋ねると、「そりゃ知っていますよ、」とおっしゃる。「それならばきちんと説明すべきではないですか」と言ってみたのだが、答えは変わらなかった。

講話を聞いて子どもたちは

さて、講話を聞いた生徒たちがどういう感想を書いてくれるだろうか。多くの子どもたちは「聞けて良かった」と、また「安心した」と言う（これを読んで私も安心できる）。さきほど書いた、コンドームの付け方を説明した方の学校の男子生徒からは、「これで大人になっても大丈夫だ」という感想をもらえた（覚えたから今すぐやってみたい、ではないのに注目）。私は、講話ではあくまで医師として、科学的で正確な知識を提供するという立場でいる。価値観についてはフリーでいたいと考えるからなのだが、はからずも「僕は結婚してからでいい」「やっぱ、中学生でセックスはやばい」と書いてくる子がいる。養護の先生から手紙をもらうと、講話のあと性の授業で子どもたちの受け止め方がなにか変わった、と書かれていた。

性教育に反対する人たちはとかく、寝た子を起こすな、とおっしゃるけれど、エビデンスはあるのだろうか。なにをもって「寝ていた子が起きる」と判断されるのだろう。

出産シーンのビデオ

先ほど、講話のはじめに出産シーンのビデオを流すと書いたが、ある公立中学で講話の後、「ああいうのを見せるのは、いまどき普通のことなのですか」という質問が、PTA会長だという喫煙男性から出た。この質問を聞いた初めは、私にはまったく、意味不明であった。話をよく聞くと、分娩のシーンで外陰に、ぼかしがかかっていないのが彼にとって驚きだったというのだ。それを聞いて、こちらこそ驚いた。みんなで、真摯な気持ちで出産場面を見守っているのに。ぼかし？？

おとなの頭の中は、個人的な事情で色々なバイアスがかかっている。それは仕方のないことだし、個人の自由である。しかし、その個人的な見方がすべてではない。なんの偏見もない、まっすぐな子どもの受け止め方を、勝手な思いこみで邪魔してはいけない。

道徳とは、価値観の強要か？

昨年春に発行された性教育パンフレット[4]が、道徳の視点に欠けていると新聞記事でバッシングされた[5]。でも、具体的にどういうことをさして道徳と言っているのか、はっきり記述していないのでわかりにくかった。推察するに、①結婚するまでは性交をするな、②結婚してからは配偶者だけとしか性交するな、ということであろうか。②は法律的にもそうあらなければならないことである（買春・援助交際する既婚男性は、これをおかしている。おとなが範を示していないのだ）。①については、各人の価値観で違ってくると思うが、それは道徳で強要することなのだろうか。

スウェーデンの性教育

2002年夏、人権と性の先進国、スウェーデンへ研修に出向く機会にめぐまれた。1933年 設立のRSFU（スウェーデン性教育協会）

を訪れ、同会のマリア・アンダーソンさんから直接聴いてきた話であるが、RSFU設立のころはスウェーデンでも、性教育が「寝た子をおこす」ことが懸念されたという。しかし実践により結果は、ヨーロッパ諸国のなかでスウェーデンは初交年齢が高いほうなのだそうだ。具体的にいうと17歳から18歳の間で、これはアイルランド(厳しいカトリックの国)、オランダに次いで高い年齢だという。

そしてスウェーデンにも、道徳教育は、ある。キリスト教会の堅信式がその機会だ。ここでいう道徳とは、友愛、自信、謙遜、成長、将来を信じる等[6]、たいへん理解しやすい。

リプロ・ヘルスの実現を

リプロダクティブヘルス・ライツのポイントは、掲げられている、とても基本的な、当たり前のことがらを、一人ひとりが納得の上、安心して選べるということだろう。それはよそからの強要よりも、強い。自分でチョイスしたということは、自分に約束したということだからだ。

すべての子どもたちに、安心なチョイスを可能にしてあげたい。そして、すべての女性にも！

院長のハンドメイドのウェブサイト：
http://www.ogt.jp

参考文献

1) …「"人間と性"教育研究協議会」略して「性教協」
2) …平成15年6月1日　名古屋医報より
3) …アーニ出版「エイズQ&A」 北沢杏子
4) …ラブ&ボディBOOK （財）母子衛生研究会：中学生向けに作られた。子どもたちの相談にのるためのパンフレットだと考える。
5) … 2002.8.31朝日新聞　亀井郁夫参議院議員のコラム
6) …十月舎「スウェーデンの性と性教育」ビヤネール多美子　より